

# キノコと生活



曾根田 正己

きのうまで、本当にきのうまで何も生えてなかったのに、

遊び場の片隅にキノコが出ている。子供は誰も不思議に感じ、心をうちふるわすのである。私もそのようなことを経験している。しかし、母親は「毒だからお捨てなさい」といった。いや「バッチイから捨ててしまいなさい」といったのかも知れない。

一般の人がキノコをよく知っている人に対すると、必ず「このキノコは食べられますか」と聞く、決して「このキノコは毒ですか」とは聞かない。それが先程の子供の母親と同一人物であるとする、自信のない大人の一面と大人の打算

がチラッと感じられるのである。

幼児・児童の多くはキノコを食物としてみるより、単純に不思議で魅力あるものという見方をするようで、決して口へもっていかうとはしないのである。そしてキノコは童話の世界への導入媒体となり、子供の心に詩を醸し出し、夢を大きく膨らませる魔法の生物なのである。

このように大人より子供の方が純粹にキノコと向いあうのであるが、それを「有毒だから」とか「きたないから」とかいう理由で捨てさせるのはまったく意味がない。また若し、心配のように毒について考えるならば、むしろ、よく観察さ

せるべきではなからうか。ことわっておくが、子供が見つけて口に入れる程度の一片のキノコでは中毒などすることはなく、勿論死ぬことなどないのである。

ともかく、キノコについてまったく興味のない人もあるが、興味があっても知識の無い人が多い。それだけでよく、知識を必要とするけれど全然無い人がいることも確かである。

近頃入手した『入門食品衛生学』なる大学の教科書がある。食中毒の項の中でキノコの鑑別法として次のことが挙げられている。

①茎が縦に裂けるものは―である。②色があざやかで美しいものは―である。③悪臭のあるものは―である。④苦味や辛味のあるものは―である。⑤茎につば(下環)のあるものは―である。⑥乳汁を分泌しているもの、粘性の液をだすもの、空気で変色するものは―である。⑦銀さじと煮て黒変したり、曇ったりしたものは―である。

この一線の部分はそれぞれ有毒とか無毒とかが入るのである。またこの個条書きの下には次のようなことが書かれている。「以上は一般的にいわれる鑑別法であるが、例外が多く信頼されるものではない。十分にわかったものを食べ種類

不明のものは食べてはならない」と。

前記の七個条は日本にある古くからの毒キノコ鑑別法の迷信羅列であり、まったく危険極まりないことである。なんとすればこの教科書を使用する教員はおそらくこれを説明し、学生はこれを記憶し、その学生がまた教育として説明すると考えられるからである。また、個条書の下添え書きをよく読んでみると、上の七個条は何の為に書かれたものか、まったくわからず、このような教科書こそ有毒であると鑑定するものである。

### キノコの呼び名について

キノコは茸、菌、蕈と書き、近頃一般に使用される「木の子」は当て字である。鮮や鱧を寿司と書くのと同じである。「季の子」や「季のこ」と考えても不自然とはいえない。これは季節節に出る小さいもの、または季節節にのこのこ(擬態語)でてくるものという意味である。信州ではイグチ属などのキノコをジゴボウと呼ぶ、これは時候に出てくる坊主(子供)という意味であり、さきの発想とまったく一致している。この他キノコという汎称に対して各地で方言・俚言がある。

“なば” “もたせ” “こけ” “みみ” “たけ” “くさびら” がこれである。

## なば

“なば”は九州、南四国など大変広い言語域をもち、八重山諸島ではナーバと発音する。滑生と書く、大言海によると粘質とか膠質とかを表わす言葉とあるが明瞭ではない。筆者は“なま”（生のこと）の転音であり、魚のように腐りやすいのでこの名があるとしているが賛成者はあまり多くはない。

## もたせ

“もたせ”は“もたし”ともいう。東北、北関東、北陸などの一部で使われる俚言である。子音で終ることと言語域が北にかたよることからアイヌ語と関係ありという説があるがなんの証拠もない。原義は木にもたれるとか木にもたせかかるとする人が多く、筆者も過去においてそのように書いて来たのであるが、ここで新説を提案したいと思う。“もたせ”という言葉はそのまま現代用語として使用されているからである。“おもたせ”と丁寧語にするとわかると思うが、手土産を意味する。勿論これは神からの“もたせ”ということ

であり、筆者としては雷（神鳴り）からの“もたせ”として考えたい。わが国では古来、雷を擬人的に考えていたこと、雷が立木に傷口をつくること、キノコは木の傷口などによく発生することなどを考えあわせると、木にもたれて出るという説より、筆者の新提案のほうが、より自然ではなからうかと思つてゐる。

中国に雷丸らいぐわというキノコがある。雷が落ちて地下に入り、丸となり、それよりキノコが出ると考えている。まさに雷のもたせである。この菌は竹林に発生、一センチないし一センチ五ミリ、赤褐色で堅い粒（菌核という）をつくり、その粒よりひだのある子実体（キノコ）を発生するという。この雷丸は秘薬として珍重され、わが国には奈良朝の時、あの鑑真大和上によつてもたらされた。その数十粒は今もなお正倉院薬物として保持されている。

## こけ

“こけ”は富山県、石川県や岐阜県の一部の地域に使われている。木毛と書く。ゼニゴケやスギゴケの蘚苔類とまったく同音である。しかし、この地方の人達は同名異物になんかの抵抗も感じないようである。民芸品にこけしがあるが、形に類

似性があり、この二つは共通語源をもつものと考えられる。

## み み

「みみ」は佐渡や石川県などで使われている。苺を誤読した説、木耳（キクラゲ）からきたという説、ヒトや動物の耳と形態や感触が似ているからという説などあり明瞭ではない。

## た け

「たけ」は現代用語であると同時に古語である。苺、菌、蕈が当てられる。竹と同音であり、活力のあふれるさまを表わす「たける」「および」「たけり」の名詞形である——というのが一致した意見である。ただこの「たけ」の意の中にはたぶんに性的な意味が含まれていると考えてよい。

神話の中に天鈿女命あめのすめのみことが天岩屋戸の変で舞を舞って天照大神を慰めまいらせる話があるが、この時「たけ」を持って踊られたと伝えられている。後世、この時の女神を象徴したといわれるオカメの面をもって踊る神楽が笹竹を持ってする習なま慣なとなつてゐる。この天岩屋戸の前での踊りによって神々が爆笑されるというのであるが、笹竹では面白くもおかしくもないのである。肌をあらわにしてキノコを打ち振って踊った

であろうと想像するのは間違ひであろうか。

## く さ び ら

「くさびら」はキノコの古語である。「たけ」と同様に、菌、蕈、茸の漢字が当てられる。また蔬とも草片、さらには久佐比良、久佐非良なども書く。くさびらは「くさ」と「ひら」の複合語である。くさは艸で地面から生え立つという意味で木ほど大きくないものを指す。ひらは薄くて平たいものを意味する。

源順（九一一―九八三）の作といわれる宇津保物語・菊の宴うたげの中に「透箱すきばこ四つにひら杯据ゑて、紅葉折り敷きて、松の小菓物盛りて、菌きのこなどして、をばな色の強飯かぢいなど参るほどに、雁鳴き渡る」これはまさしく、秋の野における宴の情景である。「菌などして」は矢張り「くさびらなどして」と読むのである。そしてこの一文によって、キノコなどによって色を着けた強飯があつたことがわかる。同じく宇津保物語の「国ゆづりの下」には次のような件くだりがある。「御前の朽木くちに生いたるくさらびらども、あつものにせさせ、にがたけなど調じて、白銀の金鏡かみまろに入れつつまゐれば、君たち興じつつ、召し添へつつまゐる」これは椎茸のような枯木から出たキノ

コを煮物とし、ニガタケ(苦菌)を入れて調理したと解釈でき、キノコを「くさびら」といい、同時に「たけ」と呼んだことがわかる。また食習慣なども窺え興味深い。

大蔵流、和泉流の能狂言に「くさびら」がある。昔とも菌とも書く。「おとこ、まかり出でたるものは、このあたりに住いたすものでござる。この間、某が庭前へ、ときならぬ「くさびら」が出ましたによって取捨ててござれば、一夜のうち、またものごとくあがります。それより、再三取り捨てますれども、おいおい大きゅうなつてあがりまするに、よつてなにやら心にかかつて悪しゅうござる。それにつきここにお目にかけてさせらるるお先達がござるによって、参つて占うてもらい、また加持を頼もうと存ずる」という口上からはじまる狂言である。山伏、おとこくさびらの十二名が登場する。ときならぬ季節に庭に出てきたくさびら(キノコ)を再三つみとつたが、後から次々と大きいのが出てきて気味が悪くなる。そこで山伏に祈禱を頼む、山伏法印が来て、これは天狗のしわざといひ呪文を唱えると消えてしまう。山伏が得意になったのもつかの間、またもや「くさびら」がいっぱんに生えてきたので山伏は立腹したり、祈つたりする。結局、ききめがなく、棒を振り上げ大格闘、しかし、次々に生

える「くさびら」に負け「ゆるいてくれ、ゆるいてくれ」と逃げ出すという筋書である。

まことにユーモアたっぷりのものである。また、山伏をひどくやつつける為に「鬼茸」が出てきたり、キノコが山伏に對して「取つて喰もう」といわせる新しい台本もある。という。この狂言は江戸初期に演じられたものらしく、キノコへの不思議さと奇妙さのイメージがあますとこなく表現されたものといえる。(山伏は例の山伏姿、おとこは狂言袴、くさびらは一文字笠、びなん帽子などをかぶり、賢徳、嘯吹、登髭、乙などの面をつけている)

大津の郊外に菌神社なる社がある。昨年筆者はここを訪れたが、駅前交番はともかく、近所の人でさえもその正式の名前を知らないのに驚いた。この神社の縁起によると田面に落雷があり、その跡にキノコが生えた。その年は豊年であったことから、時の帝であった舒命天皇が勅命を下され創られたという。これは宇津保物語より前の七世紀のことである。この神社は境内が広く、昔日を偲ばせるものがあるが、今は小さい社と近年つくられた舞殿があるだけである。しかし参道の入口の石碑にはたしかに「菌神社」と刻まれている。

(東京家政大学)